

障害者が活躍する 社会の懸け橋になる

国際パラリンピック委員会理事
会にも参加しているコロンビ
アのサラサールさん。今年で
38歳になる彼は24歳のときに事故にあ
い、頸椎を損傷し障害を負った。そのリ
ハビリの過程で障害者スポーツに出合
い、スポーツの持つ可能性を求めて、2
年後に障害者のためのリハビリ、心理
社会的支援、職業訓練、スポーツ活動
などを提供するNGO団体「アーケエン
ジェルズ」を発足させた。その活動を開
始してすぐに、JICAが行う「障害者スポ
ーツを通じた社会参加」という研修コース
に参加した。

「障害者と健常者が一緒にスポーツを
楽しむ工夫などの研修は印象的で、ス
ポーツを通じた社会参加の方法を知る
ことができました。障害者を受け入れる
日本の文化や方法など、日本での経験
を、その後の11年間の活動の中でつね

に実践してきたほどです。私の今のキャ
リアに大きな影響を与えています」
帰国後、障害者スポーツの普及と
障害者の権利拡大の活動に努め、障
害のあるアスリートのためのパンアメリ
カン競技大会では、母国の車椅子ラグ
ビーが銅メダルを獲得した。今では、ラ
テンアメリカ各国にも活動を広げ、国家
としてできることを実践している。

スポーツは、人々を動かし、変えること
ができる素晴らしいアプローチであること
を、より多くの人に広めている。



「おたがいに尊重しあう社会をスポーツでつくる
ことが私の役割」とサラサールさん



JICA研修「障害者スポーツを通じた社会参加」に参加

国際パラリンピック委員会理事

フアン・パブロ・サラサールさん

履歴書

1980年	コロンビアで生まれる 24歳のときに事故で障害を負う
2006年	NGO「アーケエンジェルズ財団」を設立
2007年	JICA研修「障害者スポーツを通じた社会参加」に参加
2013～15年	コロンビア・パラリンピック委員会会長、 身体障害者スポーツ連合代表
2015年	大統領府の「障害者のインクルージョンプラン」代表、 国際障害者委員会（CND）メンバー
2016年	JICA国別研修コロンビア「障害のある紛争被害者の ソーシャルインクルージョン」に参加
現在	国際パラリンピック委員会コロンビア代表、障害者に 対する差別撤廃米州委員会会長

「外に出る」勇気と 未来をくれたスポーツ

青年スポーツ省にて。前列中央がデラナさん



JICA研修「障害者スポーツを通じた社会参加」に参加

ロンドンパラリンピック・ハイジャンプ金メダリスト

イリエサ・デラナさん

履歴書

1984年	フィジーで生まれる 3歳の時に事故で障害を負う
2008年	JICA研修「障害者スポーツを通じた社会参加」に参加
2012年	ロンドンパラリンピック・ハイジャンプ（F42カテゴリー）金メダル
2013年	フィジーの2013年回顧記念50セント硬貨に描かれる
2014年	フィジー議会議員、青年スポーツ省副大臣
現在	青年スポーツ省勤務

大洋州地域の島しょ国、フィ
ジーに初めての金メダルを
もたらしたのが、パラリンピ
アのイリエサ・デラナさんだ。「ス
ポーツは公平に栄誉をもたらしてくれ
た」と胸を張る。

「身体的に不利な条件があってもで
きることの選択肢の一つが障害者ス
ポーツでした。スポーツに出会う前は、
とても内向的で町に出かけることがな
かった自分が、スポーツをきっかけに
外へ出るようになりました」

そして、JICA研修に参加した同国
のフレッド・ファティアキさんに出会い、
2008年にJICAの「障害者スポーツを
通じた社会参加」の研修を受けるた

め、遠い日本に渡航する機会を得た。
新しい友達ができ、前向きに取り組む
ことを学んだ。

「研修の後、コンプレックスがなくな
り、自信をもって人と接することができ
るようになりました。そんな自分を見て、
周りの反応も変わっていきました。自
分が変わることによって、周りも変
わったのです。そういった経験がその
後の自分を後押ししてくれました」

現在はフィジーの青年スポーツ省
に勤め、スポーツの普及に力を注ぐ。
金メダリストに上り詰めた彼の経験は
多くの人に勇気を与え、障害のある
子どもたちにとって未来への希望と
なっている。

新たな人生を見出す スポーツが持つ力

JICAのスポーツ協力をきっかけに
夢に向かって大きく羽ばたいていった人たちは数多い。
過去から現在——人生の歩みを3人の方に教えてもらった

文●田中弾（編集部）

野球を通じて知った 日本人の思いやり



スリランカ野球連盟

大学卒業後、九州を中心にホテルを展開する「アメイズ」AZホテル チェーンに就職。「会社
の理解があつてここまでこれた」と話す。南九州で地域貢献活動を行う「アイロード・プラス」
に今年の4月に転職し、さらなる活動が続ける。審判員としてオリンピックも目指す！

ウィジャヤナーヤカさんが野球 指導のJICAボランティアに 出合ったのは2002年のこと。

キャッチボールは取る人の立場になって
投げる、チームのためには4番バッター
でもバントするといった考え方にふれて、
野球には思いやりの心があり、その心が
日本の文化だと感じた。

以来、日本のことをもっと知りたいと大
分県の立命館アジア太平洋大学に入
学。日本は野球のレベルが高いため、選
手ではなく審判員の道を目指し2008年に

JICA海外青年協力隊員から野球指導を受ける

アマチュア野球 国際審判員

スージーワ・ウィジャヤナーヤカさん

履歴書

1983年	スリランカで生まれる
2002年	JICA海外青年協力隊員から野球指導を受ける
2006年	立命館アジア太平洋大学に入学 野球の審判員を志す
2008年	大分県で審判員の資格を取得
2012年	母国で南アジア初の野球場建設に尽力
2015年	第87回選抜高校野球（春の甲子園大会）で審判を務める
2017年	母国で初の女性野球チームを陸・海軍に設けることに尽力



写真は軍隊の女子野球チーム。次は警察の野球チーム結成が夢

資格を取得した。2010年に東京で行われ
た世界大学選手権ではスリランカ代表
チームの国際審判員として判定を行い、
2015年には高校野球の聖地、甲子園の
土も踏んだ。初の外国籍の審判員だった。
「地元九州の野球連盟の方々のやさし
さが胸に込み上げてきました。実は高校
の甲子園大会には、私が加盟していた
福岡県の高校野球連盟に審判の機会
が回ってくるのは2～3年に1度だけで、
しかも審判員157名（当時）のうち1名
しか派遣できませんでした。『スジ（愛称）

ならいいだろう』と私のために自分を犠
牲にして譲ってくれたのです。感謝の気
持ちしかありません」

また、JICAはスリランカへ野球指導の
ボランティア派遣を続けていたことから、
彼もそれに協力して母国に野球道具を
送り、南アジア初となる野球場の建設
に携わり、軍隊内の男子と女子の野球
チームの設立にも関わった。

「私も相手を思いやる心を多くの人に
伝えたい。それが『ご恩を返す』ことに
つながると信じています」